

祝 町制施行・中央公民館・社会福祉センター落成記念式典



町制施行・中央公民館・社会福祉センター落成記念式典
中央公民館大ホールで約600人の列席の下に行なわれた。

本町の町制施行、中央公民館、社会福祉センターの落成を記念する式典及び祝賀会が五月二十六日午後二時半から完成間もない中央公民館で町内外から約一千人を集めて盛大に行なわれた。

また、式典を前にして、午後一時半に同公民館と同センターのテープカットが行なわれ、両施設は一般公開され、各部屋を参観した方々は「モダンでりっぱなものだ。」と満足顔だった。

記念式典には、町民をはじめ県や中・南部各市町村から多くの来賓が出席、町昇格と両施設の落成を祝った。翁長収入役の開式あいさつ、平安助役の経過報告のあと、本町発展のため尽力下された歴代村長・議長に感謝状と記念品が手渡された。また、両施設建設に伴ない用地提供者、工事関係者多額寄附者にも感謝状が贈られた。

そのあと、あいさつに立った宮平町長は「町制施行を契機に、町民相互の融和を深め、対話と連携を一層密にし、現状の安定した状態に尽して満足することなく、新しい目標に向って常に流動するものでなければならぬ。今後たゆみなく発展に向って前進していかなければならない。」と述べ新生・西原町の建設に決意を新たに示した。

町長式辞のあと、親泊議長や仲宗根教育委員長のあいさつ、県知事、県議長、県教育長、県町村会長、県社会福祉協議会長などの来賓祝辞を受け、小川教育長が閉式のことを述べ式典を終了した。

式典終了後全員が屋外に出て、皆が見守る中、町長・町議会議長、県知事、県議会議長の手によって記念植樹が行なわれた。一方、公民館の民族資料室では西原町写真クラブ主催の写真展が行なわれ、本町の過去十三年間の歩みを物語る写真二十八点が展示、参観者の目をさそった。

午後四時半から両施設のホールで落成祝賀会が開かれ、午後七時まで余興と懇親が行なわれ、町制施行と両施設の落成を祝った。

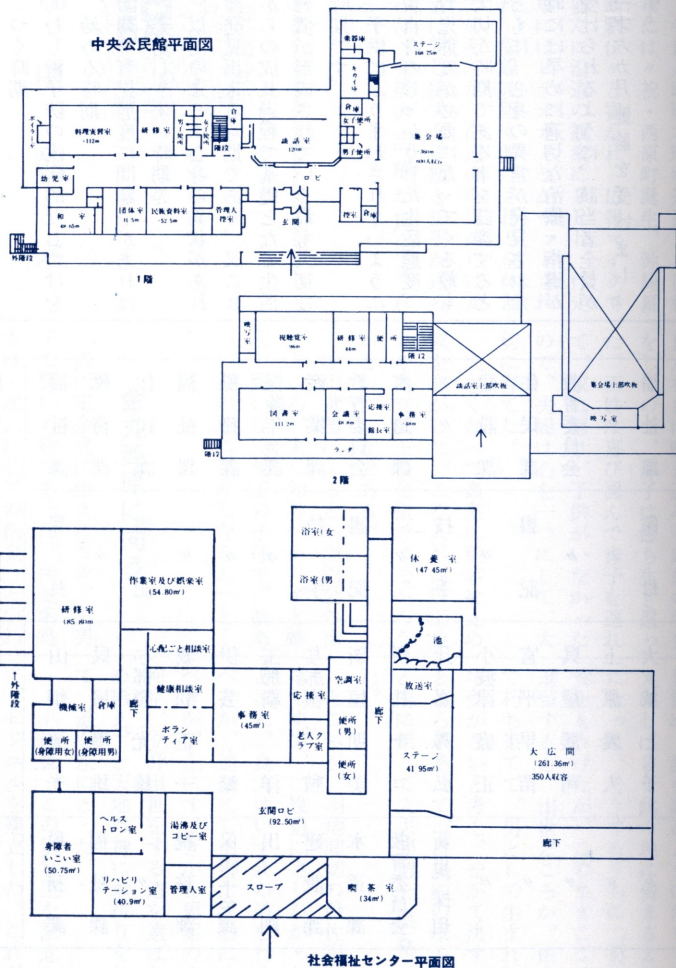
尚、中央公民館の一般町民の方々への使用については、七月頃からはじめる予定である。

《両施設がオープン》 新生・西原町、決意新たに



発行所
西原町役場
西原町字嘉手苅112番地
電話 (09894) 5-4533
印刷
印刷センター 大永
電話 (0988) 67-5111~3

町の世帯・人口
(昭和54年4月末日現在)
世帯数 3,719世帯
人口 15,536人
男 7,910人
女 7,626人
4月の人口移動
出生 26人 死亡 6人
転入 100人 転出 93人
婚姻 9件 離婚 1件



▶本町発展のため尽力下された歴代村長・議長に感謝状が手渡された。

▶町長、町議会議長の県知事、県議会議長の手によって記念植樹。

▶中央公民館が一般公開され各部屋を参観して回る町民。

▶社会福祉センター大ホールでは同センターの落成祝賀会が催された。

町商工会

第4回通常総会

組織の拡充強化を目ざす

設立後五年目に入る町商工会（古波蔵保雄会長、会員二百四十名）では、五月三十日午後二時



町制にふさわしい組織拡充を目ざす町商工会、中央公民館大ホールで

から中央公民館で会員約七十人を集め、第四回通常総会を開いた。議案は総て承認されたが、本町

の町制施行に伴いこれまでの村商工会を町商工会に改める定款改正などが決議された。

一才六カ月児

健康診査について

すべての子供が、社会の中で健康に育つためには、健康診査が必要である。今年度は、町商工会が主催となり、町民の健康を促進し、子育て支援の一環として、一才六カ月児健康診査が行なわれる。

今年度は、町商工会が主催となり、町民の健康を促進し、子育て支援の一環として、一才六カ月児健康診査が行なわれる。今年度は、町商工会が主催となり、町民の健康を促進し、子育て支援の一環として、一才六カ月児健康診査が行なわれる。

今年度は、町商工会が主催となり、町民の健康を促進し、子育て支援の一環として、一才六カ月児健康診査が行なわれる。今年度は、町商工会が主催となり、町民の健康を促進し、子育て支援の一環として、一才六カ月児健康診査が行なわれる。

今年度は、町商工会が主催となり、町民の健康を促進し、子育て支援の一環として、一才六カ月児健康診査が行なわれる。今年度は、町商工会が主催となり、町民の健康を促進し、子育て支援の一環として、一才六カ月児健康診査が行なわれる。

今年度は、町商工会が主催となり、町民の健康を促進し、子育て支援の一環として、一才六カ月児健康診査が行なわれる。今年度は、町商工会が主催となり、町民の健康を促進し、子育て支援の一環として、一才六カ月児健康診査が行なわれる。

今年度は、町商工会が主催となり、町民の健康を促進し、子育て支援の一環として、一才六カ月児健康診査が行なわれる。今年度は、町商工会が主催となり、町民の健康を促進し、子育て支援の一環として、一才六カ月児健康診査が行なわれる。

あなたは該当しませんか

離農給付金

農業者年金に加入できなかった者が、あるいは任意加入資格者で加入しなかった者で三〇アール（約九〇六坪）以上の自作地を含む農地を五ヶ年以上耕作してきた二〇才以上の経営主が適格な第三者に農地を処分して離農する場合申請によって五七万円から一三三万円までの離農給付金の支給を受ける。

昭和五十四年度

町職員人事異動

配置換九名、新採用六名

町では、五月一日付で町一般職用職員六名にも辞令が手渡された。また、五月十二日には、新規採用職員九名の人事異動を行なった。

配属課	職名	氏名	前任課
福祉課	課長	山畑清光	福祉課
税務課	記	呉厚雄	福祉課
住民課	記	与那嶺光雄	福祉課
福祉課	記	城間正一	税務課
税務課	記	伊芸繁	税務課
保険年金課	記	玉那覇洋	保険年金課
産業課	技手	与那嶺勲	建設課
教育委員会	技手	新垣明美	水道課
水道課	技手	伊礼キヨ	教育委員会
建設課	技手	比嘉秀弘	新規採用
住民課	書記	小波津盛正	新規採用
教育委員会	書記	宮平早苗	新規採用
福祉課	書記	呉屋勝司	新規採用
福祉課	書記	上原義人	新規採用
福祉課	書記	大城とも子	新規採用

【スポーツ】
【さだ】

内間青年会、健闘

＝本島縦断駅伝＝

内間青年会（与儀善一会長）で青年会員の親睦を図ると共に日頃は、五月十九日に昨年に引き続きの練習成果を試し今後の健闘を誓い、第三回本島縦断駅伝を行ない、



糸満から辺土岬を目ざして走る内間青年、町内東海ランドリー前で

午前七時に糸満市ロータリー前を出発し、西原町を通り、国道三二八号線（東海岸沿）を北上し、沖繩市、石川市、金武村、二見か

ら名護市へ横断し、国道五八号線（西海岸沿）を北上し国頭村辺土岬に午後四時半に到着した。百四十キロを九時間半で走破し、時速約十四・七キロ、自動車の約三分の一の速さで駅伝したことになる。走者は青年十四名、OB十名計二十四名で一人当り約五キロ走った。その内、津花波、小橋川の同好者も含まれ、三十代、四十代の方も参加した。

午前八時頃本町を通過し、広報車には祝・西原町誕生、沖繩縦断駅伝と書かれ、広報マイクで盛んに沿道の観衆にPRし、伴走車にはビデオカメラがセットされ、記録映画も製作され万全体制でのぞんだ。沿道の町民からは走者に対し絶大な声援と拍手が送られた。今後の活躍が期待される。

真水を口に吹き込み、応急の手当をしたので、赤子は忽ち生き甦った。百姓は喜び勇んで赤子を連れて、家に帰り、子供がいなかったので、夫婦は心を一つにして、大切に育てた。

大きくなって農業に従事せしめ家を継がした。この人が尚円王金丸や尚宜威王の先祖ではなからうかということである。

中山世鑑によると「尚円公の出るところ、未だ知るべからずと雖も、疑いなく先王の子孫で、故あって彼の地に至りしならん」と...

西原町における 尚円王とその伝説

(一)

西原町字与那城二四八の二 仲田朝宗

義本王の後裔か

俗説によると、尚円王金丸は、童名を思徳金（うみとくがに）と言って、伊是名首見邑（しゆみむら）において、土地の人によって、幼少より養育され、その出生は謎に包まれたままになっていて、現在ではいろいろの伝説がある。

その伝説の一つに、国頭村辺土に、義本王にまつわる口碑伝説があるが、それによると、火あぶりの祭典からまぬがれた義本王は、国頭間切辺土に落ちのびたが、しばらくそこで暮らすうちに、間切の祝女（のろ）と仲良くなり、夫婦関係を結ぶようになって山中で

佐び佳いをしていううちに、男の子を誕生した。

しかし、性来短気者の義本王は、生まれた子は自分の子ではないと言いつけて、ほかの男と密通して出来た子であると言って、浜辺に連れて行って、殺せと命令した。

そこで、祝女（のろ）と家来は仕方なく子供を浜辺に連れて行って、鶏の血を剣に塗りつけて、殺したように見せかけ、殺して来ましたと報告した。

子供は朱塗りの円い桶に入れて蓋をキチンと閉じ、水が入らないようにして「どちらか徳の有る方が救って下さる様に...」と、天地の神々にお祈りをして、海に流した。

そのとき、伊平屋島の近くで、伊平屋間切首見邑の百姓が、たまに舟を浮べて、漁をしているところに、朱塗りの円い桶が流れてきたので、掬いあげて、急いで蓋を取り除いて見ると、桶のなかに玉のような男の赤子が氣を失って入っていた。

そこで百姓は、持ち合わせの、

見染め、恋を語るようになり、金丸はしばらく此の地に留まるようになった。そうするうちに二男一女をもうけたが、このままここに逗留すると、出世どころか、田舎で朽ち果てて、男として生まれた甲斐がないと考え、やがて決するところがあって、首里にのぼろうと馬に乗って久志間切を出発した。

ところが、羽地間切の伊佐川部落の東方、二股道にさしかかったところ、金丸はいずれの道を行くべきか、迷ってしまった。右にすべきか、左にすべきかと思案の末何卒、立身出世をする道を選ばしめ給え、と天地の神にお祈りをし、道を左にとった。

後世、この別れ道を記念して、ビジュルを建立した。これが有名な伊佐川のビジュルである。

伊佐川から道を左にとり、一直線にすすんで来たところが、西原間切内間部落のはずれであった。

カヤブチ御殿と ウスクガジマル



1950年代初期の内間役殿、右上は著者の仲田朝宗氏

そこで、祝女（のろ）と家来は仕方なく子供を浜辺に連れて行って、鶏の血を剣に塗りつけて、殺したように見せかけ、殺して来ましたと報告した。

子供は朱塗りの円い桶に入れて蓋をキチンと閉じ、水が入らないようにして「どちらか徳の有る方が救って下さる様に...」と、天地の神々にお祈りをして、海に流した。

そのとき、伊平屋島の近くで、伊平屋間切首見邑の百姓が、たまに舟を浮べて、漁をしているところに、朱塗りの円い桶が流れてきたので、掬いあげて、急いで蓋を取り除いて見ると、桶のなかに玉のような男の赤子が氣を失って入っていた。

そこで百姓は、持ち合わせの、

馬にゆられて、周囲の景色をのんびり眺めながら農道にさしかかったところ、元氣よく歩を運んでいた馬が急に立ち止まった。

いくら鞭で叩いても動かさずともしない。そこで金丸は、もしや神様が此の地にとどまるようにというお告げでは、と思いついて、いたウスクガジマルの木の技を、畑の真中に突き立て、ここで生活をしようと思った。

そこで、周囲を眺めまわしたところ、こんもりと木立に囲まれたところに空地があったので、そこに小さなカヤブチの家を建てた。

幸いなことに、そばには泉がこんこんと流れていたの、水の心配もなく、自炊には適していたし、すずしい風がひねもす吹いて快適な日々が続いた。

「その泉はいまでも水がわき出ている。」

「つづく」

